

同志社大學設立の旨意

吾人が私立大學を設立せんと欲したるは一日に非ず、而して之れが爲めに經營辛苦を費したるも亦た一日に非らず、今まや計畫を熟し、時期漸く來らんとす、吾人は今日に於て、此を全天下に訴へ、全國民の力を藉り、其の計畫を成就せざんば、再び其時期無きを信ず、是れ吾人が從來計畫したる所の顛末を陳し、併せて之れを設立する所の目的を告白するの止む可らざる所以なり、

回顧すれば既に二十餘年前、幕政の末路、外交切迫して人心動搖するの時に際し、余不肖海外遊學の志を抱き、脱藩して函館に赴き、遂に元治元年六月十四日の夜、竊かに國禁を犯し、米國商船に搭し、水夫となりて勞役に服する凡そ一年間、漸く米國ボストン府に達したりき、幸にして彼國義俠なる人士の助けを得て、アーモスト大學に入り、續いて又たアンドヴァ神學校に學ひ、前後十餘年の苦學を積めり、而して米國文物制度の盛なるを觀、其大人君子に接し、其議論を叩き、茲に於て米國文明の決して一朝偶然にして生じたる者に非ず、必ず由て來る所の者あるを知る、而して其來る所の者、偏へに一國教化の敦きより生ずるを察し、始めて教育の國運の消長に大關係あるを信し、心竊かに一身

を教育の事業に擲んとを決したりき、

明治四年、故岩倉特命全權大使等の米國に航せられしや、文部理事官田中不二齋君は、歐米諸國教育の實況を取調への爲め其一行中にありき、時に余アンドヴァに在て勤學せしが、徴されて文部理事官隨行の命を蒙り、理事官と共に北米中著名の大中小學校を巡視し、更に歐洲に赴き、獨逸、佛蘭西、英蘭、瑞西、阿蘭陀、丁抹、露西亞等の諸國を経歴し、學校の組織、教育の制度等を始めとし、凡そ學制に關する者は、聊か之れを觀察講究するを得、茲に於て愈々歐米文明の基礎は、國民の教化に在るとを確信し、而して我邦をして歐米文明の諸國と對立せしめんと欲せば、獨り其外形物質上の文明を摸倣するに止まらず、必ず其根本に向つて力を盡さざる可からざるを信し、不肖を顧みず、他日我邦に歸らば、必ず一の私立大學を設立し、以て我が國家の爲めに微力を竭さんと誓ひたりき、

明治七年、余が米國より歸朝するに際し、適ま北米合衆國外國傳道會社の集會ありき、米國の紳士貴女、會する者三千餘名、余の友人にして此會に集る者頗る多きにより、諸友余を要して臨會せしめ、且つ訣別の辭を求めらる、此に於て始めて平生の宿志を開陳して曰く、今まや我が日本は、社會の秩序破れ、紀綱亂れ、人心歸着する所を知らず、今日に於て、我が日本に文化の美光を來さんと欲せば、宜しく歐米文化の大本たる教育に力を用ひざる可からず、願ふに我が同胞三千餘萬、將來の

安危禍福は、獨り政治の改良に存せず、獨り物質的文明の進歩に存せず、實に専ら國民教化の力にあるを信す、陳して此處に到り、余は覺へず涙を飲み、更に一步を進めて曰く、故に余若し我邦に歸りたらば、誓つて此の事業に向つて微力を盡さんと欲す、滿場の諸君余が赤心を看取し、幸に翼賛する所なき平と、語未だ盡きざるに忽ち滿場の紳士貴女の激讀する所となり、即席に數千圓の義捐金を得、茲に於て明治七年の末、胸中一片の宿志を齎らし、十餘年來夢寐の間に髣髴たる我が本國に歸着せり、

明治八年一月、大坂に於て、適き故内閣顧問木戸孝允君に謁し、君に向つて平生の宿志を吐露せしに君深く之を稱賛し、専ら政府の間に斡旋し、余が志を貫徹するに力を藉され、前きの文部大輔田中不二麿君、前きの京都府知事榎村正直君亦た贊助せらるゝ所あり、遂に山本覺馬氏と結社し、明治八年十一月廿九日、私塾開業の公許を得、直ちに同志社英學校を設立したり、是れ即ち現今同志社の設立したる創始なり、

斯くの如くにして同志社の設立したり、然れども其目的とする所は、獨り普通の英學を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尙せしめ、其精神を正大からしめんとを勉め、獨り技藝才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出さんとを勉めたりき、而して斯くの如き教育は、決して一方に偏したる智育にて達し得可き者に非ず、又

た既に人心を支配するの能力を失ふたる儒教主義の能くす可き所に非ず、唯た上帝を信し、眞理を愛し、人情を教くする基督教主義の道徳に存するを信し、基督教主義を以て徳育の基本と爲せり、吾人が世の教育家と其趨を異にしたるも茲に在り、而して同志社が數年荆棘の下に埋没したるも亦た茲に在り、

此時に際して、吾人の境遇に實に憐れむ可き者にてありとなり、茫々たる天下實に一人の朋友なき有様にてありとなり、基督教主義の徳育は、獨り愚民の爲めに嫌惡せらるゝのみならず、又た世上の大人君子よりも非常なる冷遇を蒙りとなり、然れども吾人同志者の、眞理の最後の戰勝者あるを信し、互ひに相助け、相勵まし、着實に、穩當に、堅確に、餘念なく吾人が志す所の者を實行し來りしに、幸にして天下の輿論は一變し、躬親から基督教を信ぜざる人にてても、基督教の實に一國の道徳を維持する勢力あるとを識認し、天下の輿論基督教を賛成するの勢ひとなり、又た一方に於て同志社教育の實効漸く顯はれ、其教育の懇篤にして親切なる、其學校の徳育智育二つながら並行して、決して偏僻なる教育に陥らざるの事は、漸く世上の識認する所となり、同志社は實に書生を托するに足るの學校なりとの信用漸く世上に行はれ、十四五年の頃ひに至つては學校の規模漸く大に、入學の子弟漸く多く、業を卒はる者漸く増し、學科の程度漸く高きに進み、而して中には父兄をして獨り普通科のみならず、其上に専門科を加

へんを請求する者あるに至らしめたり、是に於て吾人が宿志たる私立大學の基礎漸く成れりと云ふも、敢て誇張の言に非ざる可し、

然りと雖も私立大學は、實に大事業なり、之れを設立するには、多くの金を要するなり、多くの金を要するなり、吾人は誰れに向つて此志を談し、誰れと共に此事を行はんや、幸ひにして或る部分の人の信用を得たりと雖も、吾人が當時の有様は全く孤立にてありとなり、然れども黙して止む可きに非ざれば、此時より同志相識し、頻りに同感の士を天下に求めたりき、而して各地往々其賛成を得たるを以て、遂に明治十七年四月、始めて京都府會議員を招待し、數回の演説を爲し、私立大學創立の目的を發言し、其重立たる人々の賛成を得、茲に於て明治専門學校設立の旨趣と題し、大學創立の目的を記したる小冊子を發行して、賛成を天下に求めたり、是れ私立大學設立の第一着手にてありしなり、

幸ひにして此企ては天下諸名士の賛成を得たるに拘はらず、當時天下一般の不景氣に際し、賛成者あれども、寄附者なく、寄附金の約束あれども、納金あく、吾人の企ても殆んど中止の有様にてありしなり、而して余は此間再び海外に航し、同志社大學設立の事業は、同志諸氏に托し、此間唯た徐々其歩を進め、別に差したる程の事あらざりしなり、之れを要するに十七年六月より二十一年四月迄、該校設立の爲めに集りたる金高は、

其約束と納金とを合せて、殆んど壹萬圓に達したり、而して其大いに力を大學設立の事に盡せしは、實に本年にてありとす、

本年は實に吾人が計畫に取つて幸福なる年にありつるなり、本年四月、西京に於ては、智恩院にて一大會を開き、六百五十六拾名の京都府下諸紳士を招き、私立大學の設立の賛成を得んとを求め、而して北垣京都府知事の如きも、熱心此學を賛成せられ、自から賛成し、併せて府民の賛成せんとを求むるの演説を爲され、爾來京都俱樂部に於て、理事委員會を開き、今や既に資金を募集し居れり、其金高は未だ明白ならざるも、思ふに京都府民の諸君は、必ず吾人が希望を空しくせざる可しと確信す、

京都に於て斯くの如く着手するに際し、東京に於ても亦た聊か着手したる所の者なきに非ず、本年四月、余出京し、大隈伯、井上伯、青木子等に見へ、宿志を開陳し、大いに其賛成を得たり、殊に大隈伯、井上伯の如きは、本年親しく同志社英學校を實視せられ、親しく其學校の模様を閲覽せられ、大いに其成績を稱賛せられ、從つて其位置を進めて専門科を設くる事に就ては、一層吾人が志を翼賛せられたり、加之余は京濱の紳商諸氏に向つて平素の宿志を陳じたりしに、幸にして彼の紳商諸氏も、大いに之れを賛成せられ、遂に東京に於て本年四月より本月に到る迄、左記の如き寄附金額を得たり、

千 圓	大隈 伯	三千 圓	岩崎久彌君
千 圓	井上 伯	二千五百圓	平沼八太郎君
五百 圓	青木 子	二千 圓	大倉喜八郎君
六千 圓	澁澤榮一君	二千 圓	益田 孝君
六千 圓	原 六郎君	二千 圓	田中平八君
五千 圓	岩崎彌之助君		

而して後藤伯、榎本子の如きも、皆な吾人が志を翼賛せられ、未だ其金額は確定せられざれども、必ず多少の寄附金を爲す可しと吾人は向つて約せらたり、且つ又た本年五月、米國の朋友よりして、五萬弗の寄附金を申し込み、又た本年八月、米國の一友よりして更に壹萬弗の寄附金を申し込まれたり、茲に於て吾人が二十餘年來の宿望今日に至りて漸く内外の賛成を得、將に達せんとするの緒に就けり、吾人は今日に於て天下同感の人士に訴へ、此の計畫をして一步を轉ぜしめずんば、再び其期なきを信ず、今や我邦朝野の重なる政治家中に於て、井上伯の如き、大隈伯の如き、後藤伯の如き、勝伯の如き、榎本子の如き、青木子の如き、皆な吾人が志を翼賛せられ、之れが爲めに周旋の勞を厭はれず、其他各地の紳士紳商に至つても、之れが爲めに資金を投し、之れが爲めに周旋の勞を執らるゝ者、今や漸く多きを加へんとす、然りと雖も大學設立の事業は、實に一大事業也、全國民の賛成を仰ぎ、全國民の力を藉らざらんば、其成就實に覺束なきなり、是れ吾人が今日に於て沈黙する能はざる所以なり、

翻つて現今同志社の位置を察すれば、吾人が企ての決して架空の望みに非ざるを知る可し、今や同志社の社員を増加し、通則を設け、其學政の上に於て、不朽の基を定めたり、而して本社に屬する諸學校は、同志社英學校、同志社神學校、同志社豫備校、同志社女學校、別一個の病院あり、之れに附屬する看病婦學校あり、其詳細の統計は、左の一表を見て明白なる可し、而して現今同志社英學校の位置を擧げて高等中學同儕に爲すは、既に一年を出ざる可し、今や我か同志社に斯くの如き位置に達せり、今日に於て此の普通學科の上に専門學科を設くるは、是れ實に止むを得ざるの勢ひなり、是れ實に避く可からざるの勢ひなり、今日は最早大學を設立せざる可からざるの場合に達したりと謂ふ可し、大學は學問の仕上げ場なり、既に普通の學科を修めて餘力ある者は、必ず茲に學ばざる可からず、大學は教育の制度に於て、絶頂の位置を占むる者なり、今や同志社は既に高尚なる普通學科を教ゆるの學校とあり、之れに加ふるに専門學科を以てせざるは、所謂の九仞の功、一簣に欠くるあり、然らば則ち同志社今日の位地は實に私立大學を設立するの時期に迫りたりと云ふ可し、吾人は以上に於て、私立大學を設くるの顛末を陳したり、是れよりして聊か吾人が目的とする所を陳せんと欲す、吾人は教育の事業を擧げて、悉く皆政府の手に一任するの甚だ得策なるを信ぜず、苟も國民たる者が、自

の原則に於て決して疑ふ可きとに非ず、我が同志社は不肖なりと雖も、今日迄斯くの如くにして接續し來れり、若し幸に天下同感人士の賛成を得ば、愈よ斯くの如くにして之れを擴めんと欲するなり、吾人は日本の高等教育に於て、唯た一の帝國大學に依頼して止むべき

(明治廿一年十月一日)

五

者に非ざるを信ず、思ふに我が政府が帝國大學を設立したる所以んは、人民に率先して其模範を示したる事ならん、思ふに日本帝國の大學は、悉く政府の手に於て設立せんとするに非ざる可し、吾人は豈に今日に於て傍觀坐視するを得んや、吾人は政府の手に於て設立したる大學の實に有益なるを疑はず、然れども人民の手に據つて設立する大學の、實に大なる感化を國民に及ぼすを信ず、素より資金の高より云ひ、制度の完備したる所より云へば、私立は官立に比較し得可き者に非ざる可し、然れども其生徒の獨自一己の氣象を發揮し、自治自立の人民を養成するに至つては、是れ私立大學特性の長所たるを信ぜずんば非ず、

教育は實に一國の一大事業なり、此一大事業を國民が無頓着にも、無氣力にも、唯政府の手にのみ任せ置くは、依頼心の最も甚たしき者にして、吾人が實に浩嘆止む能はざる所なり、凡一國文化の源となる者は、決して一朝一夕に生したる者に非ず、米國の如きは清教徒が寂寞人なく、風吼へ、濤怒る、大西洋の海岸に移住してより十五年を出てざるも、早やハーワルド大學の基を開けり、而して今日に至つては、其學校の教員一百拾人、書籍拾三萬四千卷、其資金は一千四百八拾五萬四千三百七拾貳弗に達せりと云ふ、思ふに米國人が自治の元氣に富むも、豈に此の大學の如き者、關りて力なしとせんや、獨逸の如きは我邦足利の時代より續々と大學を設け始め、今は既に三十有餘の廣大なる大學あり、伊

太利の如きも既に十七個の大學を有せり、而して我邦に於ては、唯一の政府の手に依頼して建てたる帝國大學あるに止まるは、國民教化の目的に於て欠乏する所なきか、國民が教育に注意するの精神に於て欠乏する所無きか、國家將來の命運を慮るに於て欠乏する所無きか、是れ吾人が不肖を顧みず、我邦に私立大學を設立せんと欲する所以んなり

教育といふ人の能力を發達せしむるのみ止まらず、總へての能力を圓滿に發達せしむるを期せざる可からず、如何に學術技藝に長じたりとも、其人物にして、薄志弱行の人たらば、決して一國の命運を負擔す可き人物と云ふ可からず、若し教育の主義にして其正鵠を誤り、一國の青年を導いて、偏僻の模型中に入れ、偏僻の人物を養成するが如き事あらば、是れ實に教育は一國を禍ひする者と謂はざる可からず、

今や我邦に於ては、歐米の文化を輸入するに際し、獨り物質上の文明を輸入し、理論上の文明を輸入し、衣食住を輸入し、鐵道を輸入し、蒸氣船を輸入し、法律を輸入し、制度を輸入し、文學科學の思想を輸入し來たれりと雖も、要するに其の文明の由つて來る大本大牒に至つては、未だ着手する所の者あらざるが如し、故に人心自から歸向する所を失ひ、唯た智を翫ひ、能を挾み、藝を術して世を渡らんとするに至り、而して此の弊風を矯めんと欲する者無きに非ざれども、唯た國民文弱の氣風を矯むるに汲々とし、所謂る角を矯めて牛を殺し、

枝を析いて幹を枯すが如く、文明の弊風を矯めんと欲して、却つて教育の目的は、人爲脅迫的に陥あり、天真爛漫として、自由の内自から秩序を得、不羈の内自から裁制あり、即ち獨自一己の見識を備へ、仰いて天に愧ず、俯して地に愧ず、自から自個の手腕を勞して、自個の運命を作爲するが如き人物を教養するに至つては、聊か欠くる所の者なきにあらず、是れ實に吾人が遺憾とする所あり、

吾人の見る所を以てすれば、歐洲文明の現象繁多なりと雖も、概して之れを論すれば、基督教の文明にして、基督教の主義は、血液の如く、萬事萬物に皆な注入せざるはあし、而して我邦に於ては、唯た外形の文明を取つて之れを取らざるは、是れ猶ほ皮肉を取つて血液を遺す者に非ずや、今まや我邦の青年は、皆な泰西の文學を修め、泰西の科學を修め、我邦を扶植する第二の國民とならんとせり、然れども其教育たるや、歸着する所なく、皆な其岐路に彷徨する者あるに似たり、吾人への之れを見て、實に我邦將來の爲めに浩歎に堪へざる者あり、吾人の不肖決して爲す所なしと雖も、皇天若し吾人に幸ひを下し、世上の君子、吾人が志を助くるとあらば、吾人不肖と雖も、必ず今日に於て此の不肖を忘れ、此の大任に當らんと欲す、之れを要するに吾人は敢て科學文學の智識を學習せしむるに止まらず、之れを學習せしむるに加へて、更に是等の智識を運用するの品行と精神とを養成せんとを希望するなり、而して斯くの如

き品行と精神とを養成するは、決して區々たる理論、區々たる檢束法の能く爲す所に非ず、實に活ける力ある基督教主義に非ざれば、能はざるを信す、是れ基督教主義を以て、我か同志社大學德育の基本と爲す所以ん、而して此の教育を施さんが爲めに、同志社大學を設立せんと欲する所以んなり、

吾人の目的斯くの如し、若し夫れ此事を曰して基督教擴張の手段なり、傳道師養成の目的と云ふ者は、未だ吾人が心事を知らざる人なり、吾人が志す所の者、尙ほ其上に在るあり、吾人は基督教を擴張せんが爲めに大學校を設立するに非ず、唯た基督教主義は、實に我か青年の精神と品行とを陶冶する活力あるとを信し、此の主義を以て教育に適用し、更に此の主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ、故に吾人が先づ將來に於て設けんとする大學専門の學科は、現今同志社に在る神學科の外に於て、政事、經濟、哲學、文學、法學等に在り、若し是等の諸學科を一時に設置すると能はずんば、漸次に其最も實行し得易き者よりして設置せんと欲す、吾人が目的とする所の者は、既に以上に明言したる所の者なり、去れば此の大學なる者は、決して宗教の機關にも非ず、又た政事の機關にも非ず、況や一地方、一黨派の人の能く爲す可き所の者に非ざるや、素より論を俟ず、

故に吾人は敢て吾人が赤心を開陳して、全天下に訴へ、全國民の力を藉り、以て吾人年來の宿志を達せんと欲

す、勿論此の大學よりしては、或は政黨加入する者もあらん、或は農工商の業に従事する者もあらん、或は宗教の爲めに働く者もあらん、或は學者となる者もあらん、官吏となる者もあらん、其成就する所の者は、千差萬別にして、敢て豫じめ定む可からずと雖も、是等の人々皆一國の精神となり、元氣となり、柱石となる所の人々にして、即ち是等の人々を養成するに、實に同志社大學を設立する所以の目的なりとす、

一國を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、實に一國を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に據らざる可からず、是等の人民の一國の良心とも謂ふ可き人々あり、而して吾人の即ち此の一國の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す、吾人が目的とする所實は斯くの如し、諺さに曰く、一年の謀といふ穀を植ゆるに在り、十年の謀といふ木を植ゆるに在り、百年の謀といふ人を植ゆるに在りと、蓋し我か大學設立の如き、實に一國百年の大計よりして止む可からざる事業なり、今まや二十三年も既に近きに迫まり、我邦に於ては、未曾有の國會を開き、我か人民に於ては、未曾有の政權を分配せらる、是れ實に我邦不朽の盛事なり、而して苟も立憲政體を百年に維持せんと欲せば、決して區々たる法律制度の上のみ依頼す可き者に非ず、其人民が立憲政體の下に生活し得る資格を養成せざる可らず、而して立憲政體を維持するに、智識あり、品行あり、自から立ち、自から活むるの人民たらざれば能はず、果し

て然らば今日に於て、此の大學を設立するに、實に國家百年の大計に非ざるなきを得んや、

吾人が宿志實に斯くの如し、其志す所を以て之れを我身に顧れば、恰も斧を磨して針を造るの事と類する者なきに非ず、余の如きは實に力微にして學淺く、我か國家の爲めに力を竭すと公言するも、内聊か愧る所無きに非ず、然れども二十年來の宿志は、黙して止む可きに非ず、我邦の時勢は黙して止む可きに非ず、又た知己朋友の翼賛は黙して止む可きに非ず、故に今日の時勢と境遇とに勵まされ、一身の不肯をも打忘れ、余か畢生の志願たる、此の一大事業たる、大學設立の爲めに、一身を擧げて當らんとす、願くは皇天吾人が志を好し、願くは世上の君子吾人が志を助け、吾人が志を成就するを得せしめよ、

明治廿一年十一月

同志社大學發起人

新 島 襄

京都寺町通丸田町上

明治廿一年十一月十日 印刷

東京駒町區有樂町二丁目二番地 印刷者 小林眞太郎
東京橋區西新屋町廿六七番地 印刷所 秀英會